

佐賀潜

真昼の醜聞



真昼の醜聞

一九六九年九月二十五日 印刷
一九六九年九月三十日 発行

定価 四五〇円

著者 佐賀 潜

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)(280)一一一一
振替 東京八〇八番

印刷 塚田印刷株式会社

製本 神田加藤製本所

© Sen Saga Printed in Japan 1969

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

真昼の醜聞

狼おおかみの誕生

一

極東通運株式会社——。

黄色いトラックを、全国いたるところの道路に走らせている会社。国鉄の駅があれば、必ず、丸に極の字のマークをつけた支店がある会社。政府の物資輸送の大部分を、一手に引受けている会社——。

その会社の経理不正を狙っている男がいた。総会屋なだろや灘伸なだのぶ輝てるというまだ二十九歳になったばかりの男だ。が、彼は不正の片鱗すら掴つかんでいない。ただ、ばくぜんとへとつもなく大きな金が、誰の眼にも触れない地の底で動いている。と、嗅ぎとっただけである。

嗅覚のきっかけは女だった。

その女、桃井千春の脂あぶらの乗った肌を抱きながら、頭の中を走りぬけた想念の中に、黒い札束が浮んだ。

「ね、お金ならいくらでもあげるわ。そのかわり、私を捨てないで……」

「俺は、金欲しさに、君が好きになったんじゃない。なりゆきだったんだよ」

「でも、心配なの。あなたがいつか、私からはなれていく

ような気がして……」

「俺は、君が好きだ。君を知って二年……もし、浮気心ならとつくにはなれているさ。二年間、いやだと思ったことは一度もない。ということは、これから先も、つづいていく可能性があるわけさ」

灘は、女の肌を手のひらで撫でまわしながら、へこの女の金は、どこから儲けてくるんだ。それを知りたい」と考かんがえていた。

ここは、恵比寿の駅に近い、グリーンコーポの五階、桃井千春の部屋。窓を覆った紫色のカーテンを透いて、朝の陽ざしが明るく染まっている。チーク材で出来ているダブルベッド、花柄模様の羽根布団はねふとん。二人は全裸のまま、顔を向け合っていた。

「あんたは二言目には、可能性というでしょ。なんとなく頼りないのよ。だから、心配になって……」

女は鼻声で頬を寄せてきた。化粧のあとがはげ落ちた、寝起きの顔だが、醜悪さは全くない。肉付がよく、ふっくらとしていて、眼鼻立がととのっている。二重瞼の大きな眼に、生々とした輝きがあり、むっちりした口元は、キスの深さを思わせる。

「男と女は、愛情の火花を散らしても、やがてさめる時がくる。愛に永遠はないよ。だからといって、俺の気持が遠のくことを予言してるんじゃない。人間とは、そうしたもの……逢うは別れのはじまりというじゃないか。別れをセーブするために、結婚という方法を取る。法律の枠かどが、男

女双方の我儘にプレーキをかけるのさ」

「結婚——それができるなら、いいんだけど、まずいわね」
「君が、桃井重四郎の未亡人である限り、極東の田城社長は、君を庇護するとうるんだね。死んだ桃井さんが、田城と特別の關係があつたために……」

千春は、軽く腕を真似をしてから、足をからませてきた。

灘は、桃井重四郎を知っていた。桃井は、総会屋としてBクラスにランクされた程度で、いわゆる大物にならないうちに足を洗い、桃井産業株式会社をこしらえ、その社長となった。桃井産業の定款によると、不動産仲介売買、建築、室内装飾、食品雑貨の販売を目的とし、資本金は二百万円だった。仕事は、極東通運ばかりで、社員は、妻の千春のほか、若い女が二人いるだけだ。

桃井重四郎は、三年ほど前、深酒がたたって、巢鴨の地蔵通りを歩行中、脳溢血で倒れ、間もなく死亡した。妻の千春が、社長の後任となり、依然として、極東通運の仕事をやっている。

最近の仕事は、極東ドリームランドの工事の一部を請負っている。灘は、ドリームランドが、米国のデイズニールンドを模したもので、規模雄大なもの——と聞いているが、その実体については何も聞いていなかった。

ただ、桃井千春と、二年にわたる深い關係をつづけている間に、二十万、三十万という金を、千春がくれ、その合計が三百万円を突破しているので、へよほどうまい儲け口があるにちがいない」と、思っていたのだ。

ところが、昨夜、いつものように時間を打合せ、千春の部屋を訪れると、彼女が五百万円の小切手をさし出し、「これ受取って……少し儲かったので、お裾分けよ」と言った。灘は、一瞬、ためらった。

小切手の額面と、千春の顔を交互に眺めながら、息を飲んでみた。

「何をびっくりなさってるの。盗んだお金じゃないのよ。仕事で、堂々と儲けたお金……これをさし上げるのは、私の愛情のしるし……貰ってくださいれば、安心なの」

千春は、喉を鳴らした。えくぼをつくり、ならびのいい白い歯がこぼれた。

「そんなに儲かったのかい」

「そうよ。たんまり……」

「驚いたな。女の細腕で……仕事は何をやったんだい」

「ドリームランドの建物の室内装飾」

「請負金額は？」

「六億ちよつと……」

灘は、六億と聞いてぎくりとした。桃井産業は、国電恵比寿駅前の貸ビルの中にある。三十平方メートル足らずの室内には、社長以下三人のテーブルと、粗末な応接セットがあるだけの、微々たる会社だ。

いわば吹けばとぶような会社が、六億円の室内装飾工事を請負うとは、想像もつかない。しかも、五百万円もの大金を、借しげもなく呉れるのは、なんとしたことだろう……。灘の頭に、黒い札束の流れが浮んだのは、この時である。

へ千春の意図はどこにあるのか。三十三歳の未亡人が、四つ年下の、しかも独身の俺を、末永くつなぎとめておくため、五百万円の小切手をくれたのだからか。女は、元来、けちん坊のはずだ。物欲の強い女が、男の歡心を買うための金としては多すぎる。とすると、よほど大きな儲けがころがり込んであるにちがいない。六億円の工事で、普通なら一割の利益が精いっぱいだろう。一割なら六千万円、法人税を払えば、手もとに残る金は、二千数百万円のはずだ。そんなほろい儲け仕事は、さらにあることではない。普通なら、大事にして利殖の道を考えるべきだ。おかしい。何かがある。隠されたからくりがあるのではないか。

灘の思考は、総会屋の観点から出発している。総会屋は、会社のバランスシートを睨んだだけで、経理不正を感じるという。彼は、総会屋としては、駆け出しである。すでに百三十八の会社の株を持ち、半期毎の株主総会のたびに、会社の総務課へ顔を出し、一百万円の包み金を貰ってくる。いわゆるDクラスの総会屋にすぎない。それでも、五百万円の小切手から、極東通運の暗い不正を嗅ぎとったのは、総会屋特有の勘を持っているからだだろう。

「せっかくの好意だから、受取っておくよ」

灘は、小切手を背広の内ポケットへ入れた。ちらりと、うしろめたい気持が掠れた。

「愛に、気をまわさないで……ただ、私は、あなたが好きでたまらないの。そのお金、それだけの意味しかないのよ」千春は、両手をのびし、抱擁のしぐさを示した。灘は、

慣れたポーズで、抱きすくめると、唇を合わせた。

風呂へ入り、スコッチウイスキーの水割をのんでから、

二人は、いつものように、全裸になって体をぶつけ合った。

その夜の行為は、いつになく激しかった。五百万円の授受が、双方の気分をたかぶらせていたのだ。

二

灘伸輝は、昭和三十七年三月、東京大学法学部を卒業すると、かねての計画どおり総会屋の世界へとびこんだ。日本に総会屋という奇妙な職業が現われてから、久しい年月が経つ。その発祥はつまびらかではないが、明治三十二年に、商法が施行され、日本に株式会社が出来てからだから、凡そ七十年になる。総会屋の歴史も商法と共に歩んだのだらう。

が、その長い年月の間でさえ、昔の帝国大学出の総会屋は一人しかない。したがって、戦後になって、東大を出た総会屋は、灘伸輝だけである。

彼が立派な学歴を持ちながら、たくさんあった就職口に見向きもせず、総会屋の世界で成功をもくろんだのは、彼の生い立ちと環境からだ。灘の父親は、いわゆる政治ゴロで、戦後、農林大臣、大蔵大臣を歴任したことのある松宮伝三郎の、影の秘書を担当していた。

文京区白山御殿町、植物園の裏に灘の家があった。家といっても借家で、家主と政治的なつながりがあったので、

殆ど家賃を払っていない。灘は、一人息子だが、生活は極度に貧しかった。父親が、殆ど家に寄りつかず、仕送りもなかったからだ。

母親は、勝気な女で、「和服裁縫仕立所」の看板を出し、針仕事の賃金だけで、灘を育てた。父親は、灘が中学三年の夏、旅先の北陸路で急死した。狭心症だったという。母親も、彼が高校三年の秋、過労がたたり消え入るように死んでいった。

「お金が欲しい。お金があれば、お前を大学へあげられるんだ」と。お父さんは、いい人だったけど、お金儲けの下手なお人だった。お前は、お父さんの真似をしてはいけない。しっかりと、お金を儲けなくちゃ……」

これが、母の最後の言葉だった。

灘の苦難がこの時からはいまいった。親戚も身寄りもない彼は、アルバイトをつづけながら高校を卒えた。家主の好意で、三畳一間を借りうけ、中小企業のお会社へ勤めるようになった。夜間の予備校へ通い、東大をめざした。月謝が安かったのと、入学すればアルバイトの口がみつかると思ったからだ。

二年後、二十歳の春、東大の文科一類に入学した。同時に、条件のいい学習塾講師の口がみつかった。住込みで月一万五千円の給与だったので、ここに在る限り、学業完成のメドがついた。

が、この就職が、灘仲輝の生涯に大きな影響を与えることになった。『文京学習塾』という看板をかかげたその家

は、文京区林町の屋敷町の中にあつた。野川朝江という三十七、八の主婦が経営者で、中学三年生の娘と二人きりで生活していた。夫は、二年前アメリカへ渡ったきり帰ってこないということだった。

塾は、小学部、中学部、高等部の三つのクラスがあり、講師はすべて東大生ばかりだった。広い屋敷のすべての部屋を教室としているが、生徒はあふれるほど集まっていた。住込みは、灘一人だったので、経理から庶務的な仕事まで担当しているうちに、家族の一員のような立場になってしまった。

灘は、この家の女主人によって、童貞を失った。住込みでから一カ月ほど経った夜、朝江が、相談があるから——といって灘の部屋へ入ってきた。湯上りの薄化粧をほどこした伊達締め姿が、いつになくなまめいて見えた。

「あなたが来てくださったので、ほんとによかったと思っています。おかげで、今期は、生徒も増えましたし、ありがたいと思っていますわ」

朝江が、膝をすすめながら、灘の手を握んだ。大柄な女で、抜けるほど色が白く、香水と女の匂いにむせながら、彼は息を殺した。灘は、まだ二十歳になったばかりだが、一メートル七十六センチもある長身で、父親似の顔は、二十六、七に見えた。髪が濃く、小鼻が張っていて、黒縁のロイド眼鏡をかけた眼に、鋭い威力があつた。一文字に裂けた口元は、労働運動の闘士のような感じがした。

灘は、朝江の異常な心の動きを知ると、全身の関節がふ

るえてきた。朝江の膝がくっつき、掴んだ手に力がこめられる。ねっとりときまつわりつく皮膚の感触、朝江の断続する生あたたかい呼吸に、彼の胸が息苦しく喘いだ。何か言おうとした。「困るんだ。いけない」と叫ぼうとしたが、声は出ない。

「ね、おねがい。私の気持ちを察して……私は夫と別れましの。心配しないで……」

朝江の重い体がのしかかっていた。灘の大きな体が仰向けに倒れる。逃れようとする意識は、朝江の手なれたしぐさによって、たかぶりに変っていく。

灘は、女体の神秘にいどんだ。夢ともうつともつかぬ行為が終ったとき、へ女とはすばらしいものだ」という感慨を抱いた。この時から、住込み講師の地位は、経営者の地位に置き換えられ、灘は、男として急速に成長していったのである。

二人の關係は、二年間つづいたが、灘が、三年生になった四月、破局がおとずれた。朝江の夫が、米国で事業に失敗し、突然帰国したからだ。夫婦の關係が、なんのこたわりもなく復活するのを眺め、灘は、朝江の家を出た。

家賃の安い下宿へ移ると、学習塾の教え子の一人の家へ、家庭教師として通うことになった。小学校五年生と中学一年生の二人の男児のいるその家は、妾宅だった。旦那は、荒木竜太郎という一流の総会屋で、経営通信」という薄っぺらな週刊誌を発行していた。

妾宅で、何回か荒木と顔を合わせているうちに、「どうじ

ゃ、社のほう、手伝わんか。学校があるから、出勤は自由でいい。子供の家庭教師は、週二回。両方で月々三万円出そうじゃないか」と誘われた。

荒木は、この頃、六十歳を越え、白髪を頂いた長身瘦軀は、老將軍のような風格があった。銀座のビルの一角に経営通信社——という事務所を持ち、六人の社員を使っていた。灘が、大学を出ると、迷うことなく総会屋の世界へとびこんだのは、荒木の仕事を知ったからだ。

灘の担当は、雑誌の広告取りだった。

荒木は、五百社に近い会社の端株を持っていて、年二回の株主総会毎に、一社から五万円ずつの包み金をもらっていた。年二回だから、一社十万円とすると、五百社では年収五千万円となる。しかも税無しだから、荒木の豪勢な暮らしぶりが判る。

総会屋は、株主総会へ出席し、決算に対し賛成演説をやる。荒木ほどの一流の総会屋になると、彼の発言は重みを持ち、不平株主や会社荒しの恐喝屋たちの蠢動をおさえてしまふ。灘は、何回か、荒木の胸持ちとして総会へ出向き、彼の颯爽たる英姿を眺めた。

灘は、法学部の学生だから、学校で会社法の講義を聞いていたが、特に、この法律に興味を抱いた。大衆が、株主として投資をする。資本の集積が、会社の動脈となり、社長以下の取締役が、会社の運営をつかさどる。その取締役の任免は、株主総会の決議によってきまるし、決算も、総会が承認してはじめて成立する。

株主総会は、会社の最高議決機関である。総会で、過半数の決議が得られなければ、決算は不成立となる。その総会を牛耳るのが総会屋だ。灘は、株式会社の仕組を研究すると、《金を握む道はここだ》と思った。株式会社は、資本主義経済の根幹をなす。米国の資本主義経済は、たやすく崩壊しないだろう。とすると、日本のそれも、まだ何十年かはつづくだろう。その株式会社に寄生する総会屋は、なんとすばらしい職業ではないか――。

灘の胸の中に希望の火がついた。

彼は、荒木に頼み、大学を出ると、配下の総会屋にしてもらった。総会屋にはランクがあった。AクラスからEクラスまでの五階級があった。Aクラスは、普通、総会のおびに一社から五万円の手当をもらう。三万、二万、一万円というように、ランクが下れば金額もちがってくる。灘は、Eクラスの三千円からスタートした。昭和三十七年四月のことである。

二年経って、彼はDクラスとなり包み金の額が一万円になったとき、荒木から破門される事態が発生した。彼が、荒木の二号深町千秋と、道ならぬ関係におちいつていることが発覚したからだ。

深町千秋は、高校を出て荒木のオフィスのBGとなつて間もなく、暴力で荒木に犯された。結局、彼の二号となり二人の子を生んだ。が、荒木は、六十の坂を越すと、仕送りこそしていたが、妾宅への足が遠のくようになった。

灘が、千秋と関係を結ぶようになったのは、大学卒業の

一年前の春である。彼は、すでに野川朝江によって、女を知っていた。二年間、毎夜のように年増女の相手をしてきた慣性が、年老いた旦那を持つ女の隙につけ入ったのだ。二人の子供が、学校へ出かけている真昼間、千秋の居間を訪れ、有無を言わず、欲望を遂げてしまった。千秋は、はじめ、あらがいを示したが、灘が、体重をのせ押えこんだときは、呼吸を乱し、受入れるポーズを示したのだ。

二人の密会が、三年間も荒木に気づかれなかったのは、千秋と荒木の体の関係が絶えていたからだ。荒木が、不貞を知ったのは、妾宅へ通ってくる家政婦の密告による。

「わしのめがね違いじゃった。貴様は、総会屋の社会から締め出してやる」

荒木から、はげしくののしられ、灘は、放逐された。一匹狼灘伸輝のたたかいが、この時からじまったのである。

三

東京には、二百人足らずの総会屋がいる。

彼らは、七つか八つのグループに分れ、それぞれ、Aクラスの親分の支配下にある。中には、いわゆる一匹狼もいるが、その殆どがDクラスだ。彼らが、親分の庇護なしに、CBAと、のぼっていくのはむずかしい。どこの会社の総会をのぞいても、荒木クラスの大物が、子分を引きつれ、会場に睨みをきかしているからだ。

灘伸輝は、荒木から放逐されると、麹町二番町の貸マン

ションを借りうけ、そこを事務所として、『灘伸輝経営研究会』という看板を出した。荒木の経営通信社——を真似したのである。

が、看板だけで、新聞も雑誌も出してない。自分の名刺に、肩書をつけるためだ。彼は、荒木の配下となっている間に、百三十八の会社の端株を買っていた。荒木の顔つなぎがあつて、いわゆる出入りの総会屋にしてもらったわけだ。

荒木に破門されると、それらの会社へ顔出しができなくなった。あとは端株の株主として、配当金を貰う意味しかない。手持の金が無くなれば、乞食になる運命にあるわけだ。

彼は、有金をはたいて、荒木の出入りしていない会社の株を、少しずつ買い集めた。そして、肩書をつけた名刺をさし出し、各社の総務課に顔出した。総務課長は、彼のランクを知っていて、一万円の包み金をくれた。

灘はあせった。へこんなことをしていたんじゃ、何年経つてもうだつが上るわけはない。大口の金を貰いたい。それにはどうするか——彼は一つの方法を思いついた。

社長族は、殆どの者が、二号をかこっている。灘が、荒木の配下にいた頃、出入りの会社の社長のリストを作ったことがある。経歴、資産、性格、素行の四つの項目に、灘が見聞した事項を書きこんだものだ。素行——は、酒、女、ゴルフ、趣味となっているが、九十一パーセントがゴルフをやり、八十六パーセントが二号をかこっていた。

その中に、極東通運株式会社の社長田城克之^{たじょうかつし}があつた。田城は、ゴルフきちがい^{きちがい}で、二号を御殿場の別荘に、三号を石神井にかこつていた。荒木は、極通出入りの総会屋というより、田城社長の相談相手のような存在だった。

「わしは、多くの財界人を見てきたが、極通の田城君ほど大物はいないな。スケールがちがうんじゃ。資本金の五百億円は、おどろくことはないが、多角経営はすばらしいものがある。傘下の会社が九十三社。本社は運送屋じゃが、やることはとてつもなくでかい。保険会社、自動車の貿易会社、総合商社から、不動産会社、食品、雑貨にいたるまで、支配下にある。それと、こんどこしらえた極東ドリームランド……わしは、現地を案内されたが、まさにおどろきじゃ」

と、荒木が言ったことがある。その社長と友だちづきあいをしている荒木が、ひどく偉大な人物に見えた。

「でも、田城社長は、女性のほうは、なかなかご発展と書いてますが」

灘は、気にかかっていることを口にした。

「君は若い。若いからそんなことを気にするんじゃ。人間は、ヘソから下は、評価の埒外^{らわい}じゃよ。だいたい、わしの眼に映る社長族は、女に惚れる奴ほど、仕事をよくやるもんじゃ。生涯、女房殿の一穴しか知らんような朴念仁^{はくねんじん}に何ができる」

荒木が、大声で笑った。

灘は、荒木が責めちぎる田城社長に会いたいと思つたが、

いまだに遠目ですら、顔をみたことはない。灘が、社長族の二号を狙ったのは、このときの荒木の言葉が、耳朶にこびりついていたらだ。

二号の存在を調べるには、退社後の社長の自動車を手行すればいい——灘は、ルノーの中古車を買った。荒木事務所勤めている間に、運転免許を取っていたし、荒木が、お抱え運転手では都合のわるい折など、灘がセカンドカーを運転することもあった。

彼が、五つの会社の社長と、特別な関係を持つようになったのは、尾行のおかげだった。妾宅が判ると、彼は、そこにいる社長を、電話で呼びだしたり、妾宅へ土産物を持参し、名刺を置いてくる。これだけで、社長は、灘伸輝の名前を知り、会社へ面会にいけば、時間を都合して会ってくれた。そして、「少ないけど広告代だ」といって、十万、二十万の金をよこした。

時には、妾宅建設の費用を調べることがあった。登記簿本をみれば、土地と建物の坪数と、建てた時期がわかる。所有者が、二号の名前になっていれば、何千万円かの、会社経理のからくりが想像される。

灘が考案した方法は、総会屋の常道ではない。会社あらしか、恐喝屋の手口だ。彼は、それを承知していたが、へ俺が生きていく方法はこれしかない。Dクラスの俺が、のし上るためだ」と、割切っていたのである。

新入社員が、一躍部課長に昇格することはないように、総会屋はいわゆる年季がものをいう。だから、株主総会で、

灘がいくら会社法の知識をふりかざし、太い声で演説をやっても、その会社の出入りの総会屋たちに叩きつぶされることが多い。だんだん顔が売れてくれば、その発言に、おのずから重みがついてくる。ただ、DクラスからCクラスになるのに、三年も五年もかかる。

灘は、それを待っていられたかった。へ一挙に、極東通運を掴んでやろう。荒木竜太郎が押えている極通に、俺の顔を一枚加えてもらえれば、格が上がる。極通出入り——となれば、他の会社も、俺の処遇を羨めるはずだ。そんな考えから、桃井千春を誘惑してやろう——と決意したのだ。

桃井千春は、荒木竜太郎の二号深町千秋の実姉である。灘が、千秋と通じている頃、荒木の使いで、恵比寿の桃井産業を訪ねたことがあった。また、千秋の自宅で、たまたま立寄った千春と、顔を合わせたこともある。

灘は、荒木から破門されて以来、千秋と会っていない。千秋は、荒木から貰った手切金で、神田の裏町に、学生相手の喫茶店を経営している。その生活を乱したくなかったからだ。したがって、灘の体内に女を欲する思いが燃えさかっていた。

へ桃井産業は、極通出入りの会社だ。桃井千春を掴めば、極通への足がかりが出来るかもしれない。うまくいけば、マンモス会社へもぐり込めるチャンスもあるだろう。あの女は、まだ三十一歳。亭主に死なれて、瑞々しい肉体を持てあましてはいるはずだ。俺が、手をさしのべれば……

灘は、一本立ちになってから三カ月ほど経った頃、千春

の会社を訪ねた。

「お聞きと思いますが、荒木さんから追い出されたんです。これから一人でやっていかねばなりません。よろしくお願ひします」

名刺をさし出し、いんぎんな挨拶をした。

千春が、ソファをすすめてくれた。

「妹から聞いてますわ。千秋を誘惑し、そのため、旦那をしくじり……みんなあなたのせい。ひどい人……」

千春が、軽く睨んだ。が、大きな二重瞼の眼の光は、やわらかく笑っているようだ。

「申しわけありません。しかし、僕だけを責めないで下さい。責任の一半は、荒木さんにもあるはずですよ。女盛りの千秋さんを、金だけで縛りつけておくことは、所詮は無理だったんじゃない」

「灘さんらしい理屈ね。きらい、そんなおっしゃりかた……千秋を誘惑したのは、自分の責任だったと、なぜ、言えないの」

千春の眼が、ほんとうに怒っているように、鋭く光った。灘は、とまどいを感じた。へたいぶ勝手がちがうぞ。男が

欲しい年頃なのに、なんとしたことだろう。三十女は、こつちが誘わなくても、よろめいてくる。それが女というもんだ。桃井千春は、変った女だ

「おっしゃるとおりです。たしかに僕のほうから……面目次第ありません」

灘は、極端なほど、深く頭を下げた。

千春が、突然、かん高く笑いだした。灘は、あつけに取られ、その姿を見守った。黒っぽいスーツを着た胸乳が、びんと張っている。妹の千秋より肉付がよく、ふっくらとした丸みがあり、女社長らしい貫禄をそなえ、ほのぼのとした色香が感じられる。

「灘さんがここへ来た目的、当ててみましょうか。私を、千秋の後釜に狙ってきたんでしょう。いかが……」

千春の、ふくよかな笑いを眺めながら、灘は、ちぐはぐな、追従笑いを浮べた。

四

灘は、せつせと桃井産業を訪ねた。

千春に、軽くあしらわれると、それだけへんたしとしてもあの女を……」と思い、足しげく通ったのである。

「社長は、僕と接触すること、荒木さんから釘でもさされてるんですか」

灘は、もどかしくなって、ずばりと問いかけた。

「私は、荒木から指図をうける弱味はないのよ。亡くなった主人は、総会屋としては、荒木の下風に立っていましたけど、極東通運を荒木に世話したのは、桃井重四郎なの。田城社長が、経理部長をしている頃から、特別の關係がありましたので……」

「田城さんと、特別な間柄という」と

「なんていうのか、田城さんの裏金づくりの、協力者だっ

たんですの」

灘は、「それでしたか」とさりげなく聞き流す素振りをみせたが、どきりとした思いを抱いた。どこの会社でも、多かれ少なかれ裏金をこしらえている。表の經理を通さず、支出する必要もあったし、経営陣が気儘に使える金を準備しておく必要もあった。

極東通運は、年間五千億円近い運賃収入があり、従業員も十五万人を超えている。その収入の二十パーセントは、政府関係の物資の輸送賃だ。業務は、運輸大臣の監督下にあり、重役陣に、運輸官僚が天下りしている。したがって、一般の民間会社と、本質において異なるものがある。

灘は、極東通運に限り、裏金經理などはない——と漠然と考えていた。ところが、極通にも裏金があった——と聞いて、体がふるえるほど驚いたのである。

「桃井重四郎社長は、なかなかの人物だったと、聞いています」

灘は、お世辞を口にした。

「私とは、二十以上も年がちがってましたの。ほんとのことという、私は、桃井の二号だったのよ。本妻が亡くなつて、お定りの昇格……軽蔑なさつてもいいのよ。こうして、楽にくらしているのも、桃井のおかげ。ですから、あなたのこと、荒木からとかかくいわれる筋合いはありません」

「じゃあ、僕を突っぱねているのは、ご本心……というわけですね」

「そうね。本心といえ、そうかもしれないわね」

千春が、喉を鳴らした。からかわれている感じがした。

「なぜ、出入り禁止を言わないんです？」

「野良犬だって、尻尾をふつてくれば、かわいいもの……そんな気持だと言ったら、きつと怒るでしょうね」

灘は、千春の舌鋒に振りまわされている自分を自覚した。野良犬——という言葉が、ごつんと胸につかえた。へ正にその通りだ。社長の二号を突きとめ、それを種に金をせしめている。総会屋の仲間で、俺のことをダニー——といった奴もある。俺は、腹を立てた。が、この女から野良犬といわれても腹が立つどころか、いきなり男の急所を掴まれたような感じがした。が、俺は、野良犬で終りたくない。東大の法学部を出ている俺が、野良犬で終ってたまるか」

「野良犬が、狼にも虎にもなることもある。桃井千春を喰いちぎることも……」

彼は、顎を引き、語氣に力をこめた。

「やっぱり怒ったわね。見どころがあるわ。思ったとおりに……」

「僕を、からかわんで下さい」

「私の言葉が過ぎた謝り賃……それとも桃井産業株式会社の出入りの総会屋に対する包み金……どちらに解釈されてもいいのよ。どうぞ、お受取りになって」

千春が、のし袋に入った金をさし出した。寸志——と書いてある文字と、千春の笑顔を見くらべながら、彼は、金包みを受取った。

帰りの車の中で開けてみたら、十万円入っていた。灘は、

千春に異常な関心を抱いた。十万円は、何を意味するのか。もう二度と来るな——という意味だろうか。それとも、好意のしるしと受取るべきだろうか。灘は、いずれとも判断しかねたのである。

日曜日の午前十一時——。

灘は、前ぶれもなく、千春の住む恵比寿のグリーンコーポを訪ねた。途中でバラの花束を買い、腕にあふれるほど抱え、五〇五号室のプザーを鳴らした。

千春の眼が、覗き穴から見ている。灘は、眼だけで会釈をおくった。ドアが開いた。千春は、小紋の着物で伊達締め姿だった。洋服姿ばかりを見なれた眼に、ひどくなまめいて見えた。

「突然、お邪魔いたして申しわけありません。先だってのお礼に、おうかがいしたのです」

灘は、ことさら折目正しい挨拶をすると、花束をさしだした。千春が、「まあ、うれしい、私の大好きな花」と、大げさな身振りで受け答えた。

「さあどうぞ、お入りになって……女の一人住い、気がねなさらないで」

灘は、案内されて奥座敷へ通された。灘のマンションの部屋とは、くらべ物にならぬくらい豪華である。二十畳はあると思える洋間、日本間は八畳と六畳の二間。ひろいキッチンルームが見える。垂れ下ったビロードのカーテンの奥は、寝室らしい。調度は、高価なもののばかりで、千春の生活のゆたかさが、手に取るように判る。

千春が、チーズと燻製を銀皿にならべ、スコッチウイスキーの壺を持ってきた。二人は、向き合って水割を飲んだ。「あなたが、きつと現われると思ってましたの。私の勘……当たったわね」

「来ちゃ、いけなかった？」

「いいえ、待ってましたの。あなたが私の体を狙っているように、私も、灘仲輝という風変わりな総会屋を……」

千春が、手をさしのべた。灘は、軽く握手しただけで離れた。女の真意が飲みこめなかったからだ。へ俺を好きなのか、きらいなのか。ほんとうに、待っていたのか。お世辞で言っているのか。ともかく、抱き合うまでは未知数だ。今更、僕はあなたを愛している——などといえないんだ。しかし、ここへ来たい気持を押えられなかったことは本当なんです。社長が一人で住むこの部屋を訪ねることが、どんな意味を持つのかも承知だった。しかし、あなたは、まだ、遠いところから僕を眺めている」

灘は、千春の眼を見据えた。その眼は開いたまま、灘の視線を受け止めている。

「私は、あなたときっと、どうかなる予感を持ってましたの。でも、そうなった後のことを考え、ふんぎりがつかなかったんですの」

「二人が、抱き合った後のこと……と、いうことは……」
「私のねがいはい、あなたがいつまでも……といったところで、限界はあるわ……その限界がくるまで、私の愛する人だけでいて欲しいと思ったのよ。奇妙ないかたかもしれ

ませんけど、男が隠れた愛人をこしらえるように、あなたが私の隠れた愛人でいて欲しい——と思っただけですの」

「すると、僕は、男めかけ……」

「私には、夫がいらないから、二号といういいかたは当てはまらないでしょうね。やっぱり、愛人ね。だから、あなたの生活費は私が負担……あなたからは一切いただかない……こんな関係、どうかしら」

千春が、首をかしげた。

灘は、返答に詰った。女からこんな交渉を持ちかけられ、「よろしくたのむ」と返事のできる男はいないだろう。男と女は、愛を燃え上らせ、自然に抱き合うものだ。まるで、物の売買のように、事前に、契約をきめて抱き合う例はないだろう。

「ずい分、虫がよすぎる話だし、男として、返事に困る問題ですな」

「だって、おたがい子供じゃないでしょ。何もかも知りつくした男と女が、長い間、関係をづつていくということとは、大へんなことじゃないかと思うのよ。ふらふらと抱き合い、そんなはずじゃなかった——と、後悔する例が多いわね。結婚にも条件があるように、私たちも、けじめをつけてから」

千春の表情に、真剣な色が浮んだ。むっちりとした唇を結び、射るような眼光をあててきた。灘の胸にうずいていたはずの情感が吹きとんだ。へ一種の契約恋愛だ。男女の愛情は、法の圏外にある。が、契約自由の原則からいえば、

こんな約定だって成立する」

「判りました。僕は、あなたの隠れた愛人になり切ります」

灘は、体を固くしながら答えた。

五

灘伸輝と桃井千春の情事は、当初から愛情を基調としたものではない。双方が生理的欲求を吐き出すための方法だった。しかも、灘は一切の経済的な負担をせず、ただ、彼女に満足を与えれば事が済む。「男めかけ」という言葉进行を思いうかべ、彼は、なんと苦笑を噛み殺したかもしれない。

男女のこんな交渉が、灘の理想とするところだったはずだ。じめじめした愛の葛藤くらい無意味なものはない——と思っていたし、女で金を使うことくらい馬鹿げたことはない——というのが持論だった。

へ女は最大の浪費者。その女に心を奪われていたんじゃ、大望の達成はできない。快通快便が健康保持の必須条件であるように、体内に、どろどろした欲望を鬱積させておくのは体に毒だ。第一、頭の回転がにぶくなる。これを放出するために、女が必要だ。しかも、金がかからぬ女。その女として、桃井千春はまさに打ってつけた」

灘が、こんな考え方を持っていたのを、千春のほうでも看破していたようだ。彼は、千春の心の動きを、頭の中で追いかけた。

へ灘伸輝は、たくましい男。二十七歳という年齢は、中年